

---

# ディザスター

智史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ディザスター

### 【Zコード】

N5811D

### 【作者名】

智史

### 【あらすじ】

地球の歴史が今知っているものとは全く違う歴史を歩み、12歳以上の人間は剣の常備が義務づけられているという荒れた世界が舞台。主人公ルークは小さな街に住むごく普通の人で平和に暮らしていた。だが突如、帝都から使節団が来るという凶報に震撼する。その一報を聞いたルークはどう立ち向かうのか…

## 第一章

地球という星は今私たちが知っている歴史を歩んでおりず、大地の5割は砂漠と化していた。

そして食料難などにより国々は乱れ、10歳以上の子供に刀などの武装が義務づけられている

### 西の外れの街、ウェスター

その小さな街に住む25歳のニート、ルーク＝ヴァンガードという男がいた。ルークは1日じゅうバーに通っていた。マスターの前に座る。マスターは店主の孫娘のシルビアが経営している。「あなたもそろそろ仕事を探さないとじゃない?」

「実はゼクトで試験を受けたんだぜ。」

「えつ、警察になる気なの?」

「別に… 適当にな。」

「ふーん。」

ゼクトとは今でいう警察であり、帝都グラヴァーゴールが管理をしている。

バーに一人の男が入つて來た。

「お、おいつグラヴァーゴールから使節団が来るぞ!」

それは凶報であった。

「なにつ! なんでこんな小さな街に…」

一時間後、馬の駆けてくる蹄の音が近づいてきた。街のものは万が一の為に臨戦態勢を敷いていた。

サツサツ

砂に足を取られる間もないほど速さでウエスタルに使節団が到着した。

「この街の食料を5割分けて貰おうか。」

それが使節団の最初の一言であった。

「なんだって！？そんなことしたりうちも暮らしていくけなくなるだろ！」

「わざわざこんな街に来てやつたんだ。それだけでも感謝しろよな。へへっ」「...」

「なんと喧嘩ひとつマリだ！」

「テメヒと話しても無駄みたいだな。長を出せー。」

「.....長を呼んでくれ。」

野次馬の一人が長を連れてきた。その長は五十代の男でどこか強そうな印象を受ける。

「私の出る幕ではないと思つたが... 私は争いが嫌いだ。とにかく話で決めよう。条件は呑めんが...」

「どいつも同じこと抜かしやがつて！」

バーの帰り道、ルークはその会話を聞いていた。その近くには野次馬が

「ルーク、お前ゼクトに入るんだよな。ならどいつもかしてくれよー。」

「いや、それは…」

退くに退けなくなつたルークだが、刀を持つていなかつた。仕方無しに転がつていた剣を拾い、使節のもとへ走つた。

「この街の食料は渡せない。悪いが帰つてくれ。」

ルークは後先考えずに言つてしまつた。

「ルーク、やめろ！」

長は怒鳴つた。

「……」まで来たら退くことなんてみつともねえ」と出来ないんだ…

「プライドの為に死ぬのか？」

「俺には守りたい……ひ、いや物があるんだ」

「……行け。もう俺は止めん。」

「……分かつた」

すると使節団の奥から偉そうな男が出てきた。

「話は済んだかね。今度はこちらからだ。まず貴様の名はなんだね？」

「ルーク、ルーク＝ヴァンガードだ。」

「我が輩の名前はハイゼンベルクだ。まあ君に言つても仕方ないか。」

「すると部下の一人が、『ハイゼンベルク卿！そんな約束をして宜しいのですか。』

「我が輩が負けるとでも？こんな事に時間を費やしていく時間はないのだよ。さあ始めるべ。」

「あ…ああ」

そんなんでルークは戦うことになった。

相手は腰元のフェンシングを引き抜き、歩いて近づいて来る。ルークはそれに怯まず、相手が近づくのを待つた。だが内心は【相手の自信たっぷりの発言は勝つ自信もあるということだらう】と感じていた。もうルークのなかでは死という選択肢しか残されていなかつた。

ハイゼンベルクはある程度の間合いを取つた瞬間、腰のフェンシングに手をかけると肉眼では見えない程の速さで一突き。ルークは運良く小石につまずき、脇をかすめた。

「クソッ 急所を外してしまつたか。まあいい、いたぶつてやる。」

「

「あと少しで死ぬところだつたぜ。今度はこっちから行くぜ！」

ルークは威勢よく斬りうつと剣を持った瞬間に、7歳の時に記憶が戻つた。

「こいは… 森のなかか？そつこえればこいド俺は稽古をしていたんだ…」

「何をしている。早く斬りかかつて来い。」

その声の主は親を失い、さ迷つていた俺に剣術を教えてくれた男だつた。

「ああわかつてるよ。」

「その態度はなんだ！」せつかく拾つてやつたのに…私が馬鹿だつた。」

「ちつ 腹立つなあ。アイツいつか倒してやるからなー！」

ルークは男と逆に進んだ。この出来事によりルークは18年後のハイゼンベルクとの戦いまで剣を握ることは無かつた。

しばらく歩いていたその時、狼がルークの背後から近づいてきた。急いで逃げ出したルークだったが眼前は小高い崖になっていた。だがルークは物怖じせず跳んだ。下には岩場が続いていた。ルークは最悪なことに着地に失敗し、岩に頭をぶつけた。

その瞬間だった。ルークの脳に感じる閃きにも似た感覚が走り抜け、記憶がさか戻る。

しかしその記憶は全て稽古の記憶だつた。さつきの男との稽古で彼の動きが止まつてゐるかのように見えた。そして体が勝手に彼の動きを真似ていた。

気がつくヒルークの目の前にハイゼンベルクがいた。稽古の記憶はほんの一瞬のことだったらしい。

ハイゼンベルクはルークの一瞬の隙を見つけ、今までより鋭い突きを繰り出した。その時7歳の自分が頭を岩にぶつけて閃きを感じたのと同じ感覚が全身を走った。驚くことにハイゼンベルクの突きがスピードで見えた。その突きをルークは余裕でかわす。

とルークは思つた。

次の瞬間ルークは体を乗っ取られる不思議な感覚が走る。すると体

が勝手にハイゼンベルクの突きと同じスピードで突きを繰り出した。だがルークの意志で急所を外したが相手はかなりの致命傷を受けた。「どういうことだ！？」「この私が負けるなどあり得ん！」ハイゼンベルクは声を張った。

「約束だ。素直に帰つて貰おうか。」

近くで見ていた長が口を開いた。

「ここの私に刃を向けたこと覚えておけ。グラヴァ「ゴールに田をつけられ、この街は潰されるぞ！」ハイゼンベルクはそういうと団員に肩を支えられながら帰つていつた。

「驚いたな。まさかお前があんな剣術を持っていたなんてな！だがこれからまた戦争になるな…この身勝手な長を許してくれ。」

「別にそんな風に思つてないよ。屈してたらプライドなんてないから…」

「やうが。成長したな…」

長はトントンとまきながら帰つた。

この後起じる戦争によりルークはさらなる死闘をその先にあるものとは…

第一章に続く…

## 第一章（後書き）

第一章は1ヶ月後ぐらいに投稿します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5811d/>

---

ディザスター

2010年11月28日07時40分発行